

広野文芸欄

季題 当季雑詠

広野町新年句会

一望の前山紅葉暮れにけり
悲喜すべて沈めてあふる冬至風呂
しみぐと師走の風にふかれおり
鯨岡 正子

宮下 純子

心急く日々となりけり雪螢
野良猫のためきねいりや冬日向
縁起物売る手の皺や年の市

酒井 津祐

日短し前ゆく人に追いつけず
八十路なる吾影うつる秋日和
梅檀うめだんの実は黄緑や軒越えて

西山 子

切れ目なく雪雲嶺を越えて来る
巖打って宙に舞い散る冬怒涛
潮騒の一瞬消ゆる虎落笛

塩 史子

たくあん漬け母の教へのそのまゝに
蕪引く農を楽しむ六十路かな
立冬や朝陽に映ゆる五社の山

阿部 真生

久方の秋の日差しの中に居り
寒い夜テトラポットの波しぶき
今年又寒い空から雪蛍

遠藤健太郎

ふる里の浜辺に拝む初日の出
書き初めの一字一氣に書き納む
初詣で願ひ短かくとなえたり

山田 基星

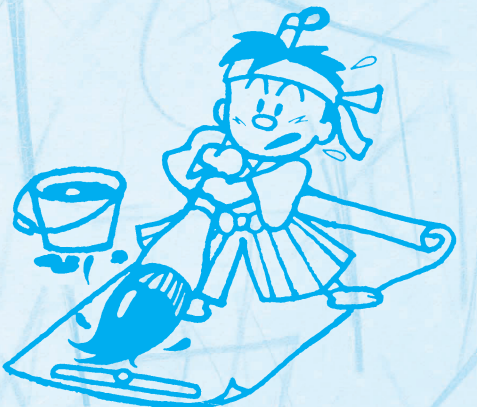
孫に手を引かれて廻る暮の市
着ぶかれてます〜我ににたる孫
寒林の透けて裏山見ゆるなり

根本 山水

雨上り輝き残す菊の花
亡き母を想うかべて柿をもぐ
さんま船の魚火遠く車窓より

鯨岡 一生

鳥小屋を今年も建つる子供会
初電話受話機あふる、孫の声
あと出しの賀状に添ふる言い訳を



広野みなづき短歌会一月詠草

(旧仮名使用 五十音順)

初なりの柚子を入れたる柚子風呂に孫ら
の喜びひとかたならず
喪を解きて賀状を書けば早や七日親しき
人へのみ発送す
猪狩ユリ子

その花はなぜか心につきささる吾の嫌いな
バイオレットなり
初春にふさわしき歌唄はむとマイクに向
ひ音合はせする
小澤 健次

「ありがとう。せわになったね」夫の声耳
にのこりて涙する日々
不器用に世を渡りたる夫なるも直なる性を
誇りと思ふ
父親の死も知らずして病床に伏す息子に
祈る奇跡あれかし
木村ミヨ子

恙なく送る日和に感謝して一人購うスー
パーに佇つ
花嫁の妻に見せたかりし晴れ姿若気に還
り今昔に解ふ
雪もなく小春日和の年の瀬に今年も安ら
に時の過ぎゆく
菅原 泰郎

逢ひみたる乙女の姿目にさやか永久に幸
あれ初夢の人
ひととせの過ぎゆき早し年賀状書きて貰
ひて良き年を祝ぐ
田副 耕一

新年を迎ふる朝にほのぼのと梅咲き初み
てその香ただよふ
詩心無きにはあらず野辺に咲く花を詠み
つつ一年すぎぬ
新田 里子

四倉より友の訪ねきてぎょうざなど作り
て食しぬ友も一人身
人は皆何の為にぞ生れける自ら命断つ人
もあり
藤田 孝夫

気になりし賀状出しきて歳末の賑はふ
バーゲンの声に寄りゆく
ウインドウの猪の絵の子沢山動くが如く
数えがたしも
三人の子十二人となりて歳月を語りつつ
お屠蘇に今宵ほろ酔ふ
音信の絶えて三年友宛の賀状戻りて睦月
過ぎゆく
山内 洋子

ゆくりなく「真野のかや原」の古史に触
れ心ほのぼの往時を偲ぶ
野馬追ひの町が昔の「真野」と知り遠世
の地史に思ひを放つ
家持かもちへ笠女郎かさぢやうらのひたごころ遠世のロマン
今にすがしも

会はれしか思ひ届きしか古き世のロマン
ス万葉の歌にのこりて
晩年の家持は尋賀城に下りしと記録とど
めて今にのこれる

岬山さきやまに遠く望めば真野原のあたりか原発
の煙ただよふ
遠きロマン温めゆけばくるみの実いくつ
落ちるて草むらの露
人まれまれのこの野の徑に野いたちのあ
そぶをみると人の過ぎゆく
かしここ古き歴史のあたたかさ見つむ
る彼方冬海の藍
山口 歌子